



内なる力を引き出してこそ
本当に美しいものが生まれます

キャンパスイルミネーション&落書き研究で名高い
工学部 建築学科 准教授
小林 茂雄



世界中を旅行しながら美しい環境に瞳目

神戸市の下町で生を受けた小林茂雄准教授は、絵と習字が上手な少年だったといいます。東山魁夷や清家清など、芸術面でも傑出した才能を輩出する県内屈指の名門、兵庫高等学校に進学しますが、その高校生活は……「自己責任を重んじるというか、非常に自由な校風だったので、好きな体育のほかは、ほとんど授業に出ず、友達と遊んでいました。ま、試験の時はそれなりに」と、訥々と語ります。「得意科目は数学と物理で、苦手科目は英語と国語。理工系学部しか選択肢がなかったの、中でも創造性の高いところはどこかと考え、建築学科を選びました」と、東京工業大学工学部建築学科へ。

「それまで関西が世界の中心だと思っていたけど、東京に出て見識の狭さを悟った」と言う小林先生は、やがて首都東京をも軽々飛び越え、全世界を旅することに至上の喜びを見出します。

「大学の2年くらいからですが、アルバイトでお金を貯め、休みがあると必ず目一杯使って旅行するようになりました」

アジア、南米、アフリカなどの、ほとんど観光客が寄りつかないところを訪れるのが先生流。旅の魅力は「たとえば、電気も通っていないアジアの寒村に行くと、江戸時代にタイムスリップした不思議な感覚に襲われるから。人が他者や周辺環境と響き合い、調和しながら生きている、その美しさは、本当に感動的です」

東工大の助手時代に結ばれた奥様とも、何度も貧乏旅行を繰り返したそうです。「子どもが生まれてからも、毎年1回、わがまま言って、一人旅を許してもらってます」。その娘さんの樹里ちゃん(4歳)と礼央ちゃん(1歳)の名前も、「一番好きな国」というインドとラオスの言葉からつけられたそうです。

人と空間の潜在力を引き出す研究、教育を

2000年に本学に着任した小林先生の主要な研究テーマは、『照明』。'03年6月には担当する建築環境工学の授業の一環として、世田谷キャンパスを色とりどりの明かりで彩る幻想的なキャンパスイルミネーションを主催しました。このイベントは、テレビや新聞にも取り上げられ、2000名もの集客を達成。以降、毎年実施され、今年で6回目を数える恒例行事となっています。先

生自身も「単なるライトアップではなく、光が人や環境にどんな影響を与えるかを考え抜いて照明を作り、配置しています。教育、研究面での成果はもちろん、他の大学には真似のできないイベントですから、PR効果も絶大です」と胸を張りますが、「手続きがあまりに膨大で、しかも経費は学生と研究費からの持ち出し。今後長く続けていくのは困難」とも。なんらかの支援策を打ち出すなどして、イベントの継続を願いたいものです。

小林先生はまた、『落書き』研究の第一人者として、テレビや雑誌などメディアで紹介されることも少なくありません。



これはバングラデシュの人力車、「リキシャ」のシートに貼られていたもの。奔放な色彩とデザインはストリートアート風。なお、左の写真で先生が持っているのは落書きをモチーフにしたシャツ。ここぞという講義や学会発表で用いる勝負服だそうです。

「もちろん落書きは犯罪ですが、何かを表現したい若者のエネルギーがはけ口を求めている点にも着目したい。ダメなものダメと押さえつけても解決できないので、公共の利益と合致する方法論を検討する必要があります」

照明にしても、落書きにしても、空間や周辺環境を度外視し、自己満足に陥るものであれば、美しくない、その場限りで後には残らない。」と小林先生。「人も空間も潜在力を持っています。それを自然に引き出してあげるのが私の仕事。教育面でも、上から教えるのではなく、学生に自分で考えさせ、内側からその力を高めてもらうよう心がけています」

こうした発想は、もしかすると、さまざまな国を旅して得た、力強い人ととの感動体験がもたらしたのかも知れません。

PROFILE ●1968年兵庫県神戸に生まれる。'91年東京工業大学工学部建築学科卒業。'93年同大学院理工学研究科社会開発工学専攻修士課程修了。同年同大学院総合理工学研究科助手。'98年博士(工学)取得(東京工業大学)。2000年武蔵工業大学講師。'03年同助教授('07年より准教授)となり、現在に至る。恒例となっているキャンパスイルミネーションの主宰者でもある。同イベントは、日本照明学会の第6回照明デザイン賞奨励賞を受賞。また、落書き研究の第一人者として知られ、NHK『クローズアップ現代』等数多くのメディアにコメンテーターとして出演している。